

石川県立歴史博物館
TEL : 076-262-3236
E-mail : rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
URL : <https://www.ishikawa-rekihaku.jp/>

資料提供

歴史博物館の令和6年能登半島地震復興応援特別展「七尾美術館 in れきはく」についてご案内いたしますので、報道等により広くご案内くださいますよう、よろしく願い申し上げます。

石川県立歴史博物館 令和6年能登半島地震復興応援特別展「七尾美術館 in れきはく」開催概要

1. 会 期 令和6年10月19日(土)～11月17日(日)【30日間】
9:00～17:00(入場は16:30まで) 会期中無休
2. 会 場 石川県立歴史博物館 特別展示室・企画展示室
3. 主 催 石川県立歴史博物館
4. 共 催 石川県七尾美術館(公益財団法人七尾美術財団)
5. 特別協力 北國新聞社
6. 後 援 七尾市教育委員会、NHK金沢放送局
7. 観覧料 一般800円(640円) 大学生・専門学校生640円(510円) 高校生以下無料
()は20名以上の団体料金/65歳以上の方は団体料金/
障害者手帳または「ミライロID」ご提示の方および付添1名は無料
※あわせて常設展もご覧いただけます

8. 趣 旨

能登地区唯一の総合美術館である石川県七尾美術館は、平成7年(1995)の開館から約30年、能登の文化活動の拠点施設として広く親しまれてきました。能登ゆかりの作家や作品を紹介する展覧会などを精力的に開催し、特に「長谷川等伯展」は七尾出身の絵師・長谷川等伯についての最新研究をもとに毎年テーマを変えて展示。同館の大きな特色となっています。また、美術館設立の核となった七尾出身の実業家・池田文夫氏が収集した美術工芸品など、優れたコレクションでも知られています。

現在、七尾美術館は令和6年1月1日の能登半島地震により建物・設備に被害を受けて臨時休館中であり、地域の文化事業は停滞を余儀なくされています。本展は石川県立歴史博物館と七尾美術館が共同で企画するもので、七尾美術館の所藏品や寄託品を通して能登の豊かな歴史・文化を発信します。

七尾美術館が地域との関りの中で大切に守り伝えてきた作品群が、金沢で一堂に展示されるのは初めてのことであり、その魅力とともに、同館が能登の文化復興と文化財保全のために果たしてきた役割を知っていただくことで、能登の文化事業を支援し、復興に向けて共に歩む契機といたします。

9. 展示構成

1章「伝えゆく池田コレクションの逸品たち」

七尾美術館の設立のきっかけとなった「池田コレクション」。七尾市出身の実業家・池田文夫氏が生涯かけて収集した美術工芸品は、「志野」「織部」「九谷」といったやきものや「根来」などの漆工、肉筆浮世絵や近代の日本画、金工や彫刻など多岐にわたります。現在 289 点が収蔵される同コレクションより、選りすぐりの優品を紹介します。

2章「長谷川等伯と能登の文化」

七尾出身の桃山時代の絵師・長谷川等伯を美術館の重要なテーマの一つとし、調査研究を進め、開館以来「長谷川等伯展」を開催し続けてきました。ここでは等伯の若き頃、信春時代の仏画を中心に展示します。あわせて等伯が絵師として大成しえた要因のひとつである「能登畠山文化」や能登地域に伝わる文化財などを紹介します。

3章「能登ゆかりの現代作家たち」

七尾美術館の所蔵品は「池田コレクション」と「能登ゆかりの美術工芸」に大別することができます。七尾美術館ではこれまで、さまざまな場面で活躍されている作家をはじめ、多くの個人・団体から作品の寄附を受けてきました。本テーマでは七尾美術館所蔵の現代作品のうち、能登出身・在住の作家や、能登の風景をテーマにした作品をセレクトし、豊かな能登の土壌が生み出した現代作品をご鑑賞いただきます。

特設コーナー「もっと知りたい！七尾美術館」

過去の展覧会ポスターなどを展示し、これまでの七尾美術館の歩みをご紹介します。

10. 関連イベント

①七尾美術館学芸員による展示解説

七尾美術館学芸員が、展示室において本展のみどころや作品の解説を行います。

10月20日（日）13：30～14：30

11月2日（土）13：30～14：30

11月12日（火）11：00～12：00

※申込不要、特別展の観覧券が必要

②ワークショップ「絵本をつくろう！」

七尾美術館といえば、秋の「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」で親しんできた方も多いはず。今年は七尾では同展を開催できませんが、その復活を願って、絵本を手作りしてみましよう！

10月26日（土）13：30～15：30

会場：当館ワークショップルーム

講師：絵本の会 もこもこ

※要申込、定員20名（応募多数の場合は抽選）、参加無料

11. その他

・開会式 10月18日（金）14：00～14：30

12. 主な出品作品

1章 「伝えゆく池田コレクションの逸品たち」

ねごるゆとう
「根来湯桶」 室町時代（15～16世紀） 石川県七尾美術館蔵（池田コレクション）

根来は中世に繁栄した紀伊国（現・和歌山県）の根来寺に由来する漆器で、仏具や僧侶の日用品などが制作された。本作は湯桶と呼ばれる、湯や酒を注ぐための食器の一種。円筒型をし、胴の上下には籬たがのような輪をめぐらす。鶴首を思わせる曲線の注ぎ口と大きな入り隅い すみの提手とってが付く。力強く明快なフォルムと、長年の使用で表面の朱漆が摩耗し、所々に表れた黒漆とのコントラストに、根来ならではの味わいが感じられる。



おりべあわびがたむこうづけ
「織部鮑形向附」 桃山時代（17世紀） 石川県七尾美術館蔵（池田コレクション）

織部は桃山時代に美濃国（現・岐阜県）で制作された「美濃焼」の一種で、造形や文様などに見られる意匠の奇抜さ、自由闊達さが特徴。本作はアワビを模った向附（茶事などで使用される懐石道具のひとつ）。銅緑釉を片身替わりに掛け、見込には鉄絵で波とサザエのような文様を描く。器形から文様まで「海づくし」といった趣で、織部の多様な意匠をよく表している。

池田文夫氏は岐阜県大垣市で紡績会社を設立し、活躍した。「池田コレクション」には織部をはじめ、黄瀬戸・志野・美濃伊賀といった「美濃焼」が多く含まれている。



せつちゅうびじんず
「雪中美人図」 宮川長春（1682～1753） 江戸時代（18世紀）

石川県七尾美術館蔵（池田コレクション）

みやがわちやうしゆん
宮川長春は尾張国（現・愛知県）出身という浮世絵師。肉筆画を専門とし、ひしかわものぶ かいげつどう
菱川師宣や懐月堂風の美人画・風俗画をよくして、「宮川派」の祖となった。

しんしんと雪が降り積もる中、禿かむろを伴った遊女が道中する姿を描いた作品。特に遊女の着物は緻密かつ流麗な線で描かれ、文様も実に色鮮やかだ。背景には雪の積もる梅枝どはと土坡をわずかに描くばかりで、静けさの中を威風堂々と歩く彼女の美しさをいっそう際立たせている。



2章「長谷川等伯と能登の文化」

重要文化財「刺繍阿弥陀三尊像」平安～鎌倉時代（12～13世紀）

七尾市・西念寺蔵

一見すると絵画に見える本作は、阿弥陀三尊像^{ししゅう}を刺繍で表した繡仏^{しゅうぶつ}と呼ばれる作品。華足付の豪華な蓮華座に座し、胸前で印を結ぶ阿弥陀如来と右側に観音菩薩、左側に勢至菩薩を配す。なお、三尊^{てんがい}や天蓋を刺繍で表し、背景は刺繍しない。刺し繡^{ぬい}を基本としつつも、各所に留め繡や返し繡といった技法も用いており、濃紺・青・緑・黄・赤など多彩な色糸を駆使したグラデーションも美しく、専門の工人の手になるものであろう。

本作は従来鎌倉時代の制作とされてきたが、平安時代仏画の趣があること、また平安末期の繡仏作品と技法上の類似点が見られることから、最近では平安時代後期～末期頃に制作されたとする見解もある。いずれにせよ、この時代の繡仏と信仰のありかたを今日に伝える貴重な遺品である。



石川県指定文化財「賦何人連歌」大永5年（1525）石川県七尾美術館蔵

「連歌」は短歌から派生して誕生した詩の一形態。短歌の「上の句」と「下の句」を、それぞれ複数の別人が交互に詠む形式を採る。「応仁の乱」以降は地方への文化伝播に伴い、連歌は各地の大名たちにも親しまれるようになった。室町時代中期から戦国時代末期まで約170年間にわたり能登国を統治した「能登畠山氏」も文芸活動を重視し、盛んに連歌の会を举行している。その一端を示すのが本作で、第七代・義総^{よしふさ}の治世で行われたものである。打雲^{うちぐも}の料紙に優美な文字がびっしりと書され、典雅な風情に満ちあふれている。

なお、本展では文明15年（1483）三代・義統^{よしむね}時代の「賦何船連歌^{ふなにふねれんが}」（県文・七尾市蔵）もあわせて展示する。



石川県指定文化財 ^{あたごこんげんず}「愛宕権現図」長谷川信春（等伯）（1539～1610） 室町時代（16世紀）
石川県七尾美術館蔵

長谷川等伯は天文8年（1539）に七尾で武士の子として生まれる。その後染物屋を生業とする長谷川家に養子に入り、はじめは「信春」の名で絵仏師として活躍した。33歳頃に活動の拠点を京に移して画技を磨き、また、一流の文化人と交流を持ち名声を高めていく。豊臣秀吉の依頼を受けて制作された国宝「智積院障壁画」（旧祥雲禅寺障壁画）、日本水墨画の最高傑作、国宝「松林図屏風」（東京国立博物館）などさまざまな傑作を遺した。

京都・愛宕山朝日峰に鎮座する愛宕権現は、^{れんげざんまいきょう}蓮華三昧経に説かれ、火伏せの神として祀られた。本地仏は^{しょうぐんじぞう}勝軍地藏で、鎌倉時代以降人びとの信仰を集め、特に武将の信仰が盛んであった。本作は^{かえん}火焰を背にして甲冑を身に着け、右手に2本の戟を持して左手に如意宝珠を載せ、正面を向いた^{あしげ}葦毛の馬に騎乗するという勇ましい姿で描かれている。画面右下に「信春」袋形印が捺されており、手などの表現から30歳代前半頃の制作と考えられる。



3章「能登ゆかりの現代作家たち」

「うづくまる女」^{たかたひろあつ}高田博厚（1900～87） 昭和50年（1975） 石川県七尾美術館蔵

高田博厚は七尾市出身の彫刻家。早くから芸術や哲学、文学に目覚め、高村光太郎と交遊し、彫刻を志す。フランスに滞在し近代彫刻の巨匠たちを研究して日本に紹介、日仏の文化交流にも尽力した。

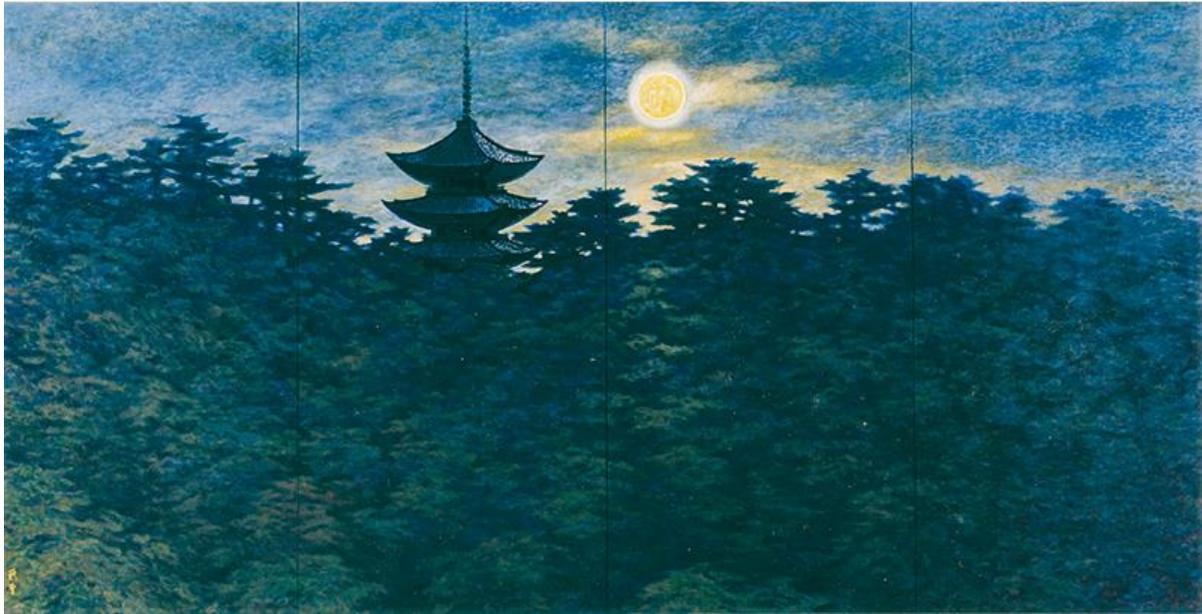
本作は両手を交差してそれぞれ肩に置き、膝を立てて座る裸婦像。滑らかな肌の質感表現は見事で、思わずブロンズであることを忘れてしまうほど。文学もよくしたという作者らしく、どこか詩的な雰囲気漂わせ、女性の美しさが見事に引き出された1点といえよう。



「古寺仲秋」^{こ じ ちゆうしゆう すいどうしゆうせい} 水道秋聖（1921～97） 平成7年（1995） 石川県七尾美術館蔵

水道秋聖は七尾市出身の日本画家。矢野橋村^{や の きょうそん}、福岡青嵐^{ふくおかせいらん}、小松均に師事し、創造展を中心に活躍した。故郷能登を中心とした北陸地方の風景を、大画面に丁寧な筆致で描き続けた。

本作で描かれているのは能登の名刹・妙成寺。森の中に屹立する五重塔は、仲秋の名月に照らされてシルエット状に輝く。まるで周りの自然と一体化したようなその姿に、妙成寺の悠久の歴史を感じさせる。



「沈金彫水引草飾箱『古城尔而』」^{ちんきんぼりみずひきそうかざりばこ こじょうにて} 山岸一男（1954～ ）平成21年（2009）

石川県七尾美術館蔵

山岸一男は輪島市出身の漆芸家。福光文次郎に師事し、伝統工芸展や伝統漆芸展などで活躍する。漆芸の加飾法の一つ「沈金」やそれを発展させた「沈金象嵌」の技法を得意とし、身近な草花や能登の風景などをあたたかな眼差しで表現している。平成30年、「沈金」重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。

本作は七尾城址をテーマにした飾箱。城跡にひっそりと咲く紅白の水引草と野面積みの石垣を、「沈金象嵌」の技法を駆使して表現する。亡き父と同所を訪れた際の思い出が創作のきっかけという。

